井上光晴論

北村耕

現代作家論叢書

上光晴論

東邦出版社

現代作家論叢書●井上光晴論

著者紹介　北村　耕（きたむら・こう）

■本名先崎金明。1926年福島県生まれ。

■新日本文学会、リアリズム研究会をへて1965年日本民主主義文学同盟創立の発起人として参加したが、1969年8月退会。

■現在中央労働学園文芸科講師。

■著書「サークル活動入門」（三一書房）ほか。論文「安部公房論」ほか。

■現住所、東京都板橋区若木2-33-12

昭和47年3月10日　第一刷発行

定価九八〇円

著者　北村　耕

発行者　藤山真人

発行所　株式会社　東邦出版社

東京都千代田区神田神保町二～二八
電話　東京（二六一）五七二五～七
振替　東京　八五二七五

印刷・日大印刷　製本・美成社

© 1972

井上光晴論　目次

まえがき……7
第一章　「政治と文学」の谷間……13
一　革命運動と人間主義的情念……15
二　《病める部分》の告発……33
三　勤皇少年と共産党員の間……54
四　辺境にさまよう「転向者」……87
第二章　原点への回帰……113
一　戦争体験への下降……115
二　職業作家としての危機意識……138
三　未来から戦後社会を撃つ思想の核……162

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第三章　現代の飢えの追求……183
一　廃鉱のイメージ……185
二　日常に耐える日常性……220
三　社会主義と文学者の自由……247
第四章　芸術方法の変革……263
一　イメージの集積……265
二　小説による小説への挑戦……301
あとがき……325
年　譜……328

井上光晴論

まえがき

中村光夫氏は《いまの文壇には共通の話題、共同の目標など（文学の理想に関しては）まずないといってよく、同じ雑誌をやって、志を同じくしているはずの作家や批評家の間でも、話が通じなくなっているようです。》（『現代にとって文学とは何か』・『読売新聞』一九七一年六月八日）と書いている。たしかに、今日ほど文学観が多様化している時代はなかったであろう。それは、価値観の多元化した現代状況を反映してのことであるが、わたしは、人間存在の真実を、その裸形と社会性の総体において探究する、知覚と想像力の統一された言語表現の空間を、文学世界と考えたい。裸形とは実存の深淵であり、社会性とは無関係をもふくむ実存の関係性にほかならない。とはいえ、わたしはこれ以外の考え方をしないとか、認めないというのではない。可能な限り自由に文学に対していきたい。もともと、複雑な拡散状況をみせている現代文学を、このような概念によって一括することに、それほどの価値があるとは思えない。むしろ不用意な意味の限定は、創造の自由を束縛し、文学の本質否定に道を開きかねない危険があることを知らぬわけではない。そのことは片時も忘れたくない。ただ、ここに一編の作家論をなそうとするとき、その前提として、わたしなりの文学観をのべておくことが必要だと思うのである。

わたしは文学を神聖視するつもりはさらさらないが、おそらくそれは永遠に客観的な解答のあたえられない深淵であり、暗闇なのではあるまいか。したがって、文学は作家の内部に深く沈潜し、きわめて個別的に息づく不安な営みというべきであろう。そうと知りつつも、いやそれ故にこそ、文学の普遍的意味を問わずにおれないのが作家であり、文学なのではあるまいか。その意味からいえば、わたしの『井上光晴論』は、作品世界の内実とその発展過程、日本文学における位相などをさぐることによって井上光晴氏の全体像を開示するにとどまらず、それを通して、文学とは何かの難問にひとつの解答を得たいが故の試みとなるであろう。

井上氏は、論理化が不可能とも思われる混沌たる人間主義的情念を秘めつつ、現代状況を内面化したすさまじい辺境をさまよいつづけている。そしてそこから現代の飢えを告発し、ひとすじに人間存在の裸形と社会性に迫る作家主体を確立してきた、詩情豊かな作家である。わたしは、井上氏の文学発想の根源にあるもの、転変をきわめる文学方法の核にあるものは、論理以前の人間主義的情念だと思う。しかも、この情念世界への自閉状況が井上文学のプラスとマイナスの両極を形成する要因になったことを指摘しておかねばならない。これによって混沌とした実存の深淵をすくいあげることができたことは確かである。しかし一方でこれは、文学としてもつべき論理性を喪失し、サルトルとマルクスのはざまで苦闘する方法に到達したにもかかわらず、現象学的方法へなだれこむ側面をもつくったのである。

しかし井上氏の作品からくりだされる文学的告発の真実性は、形式論理をもって状況を糊塗するに急な体質をもつ現代社会にあっては、諸刃の剣としておのれを傷つけざるをえないであろう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いうまでもなく、自らを安全地帯において疑わぬ文学など、およそ告発の文学たりえないことは自明である。戦後の文学運動のなかで、井上氏ほど政治と文学の相剋するはざまで深く傷つき、引き裂かれながら、一貫して文学的立場に固執した作家を、わたしは知らない。

文学的にいささかも傷つくことなく、革命的言辞の情緒的な乱舞のなかで、自己陶酔して恥じぬ鎖国状況の洞窟から脱出したわたしは、いま井上文学への挑戦を試みようとしている。それは何故か。

熱い太陽がぎらつく砂漠にも似た曠野をひとり旅する思いのわたしには、もはや安全地帯はどこにもない。残された文学の道を踏破するか、砂塵のなか深く没することになるかである。しかも井上文学はオアシスなどでは決してない。真赤に焼けただれた鉄塊である。それに挑むわたし自身も、おそらく傷つくことなしにはすまぬであろう。しかし、それを恐れては井上文学の片鱗に触れることさえ不可能なのである。

人間は、生涯にいくど存在の根源にかかわる選択を迫られるものであろうか。この数年来、わたしはそのことばかり考えさせられてきた。既存の価値観に深い混迷が生じている現代は、まさに探究と模索と選択の時代といえるが、政治と文学のはざまにひそむ地獄をみて以来、わたし自身がその岐路に立っていることを実感せざるをえなかったからであろう。しかし、同世代の井上氏が二十年前に告発し、その後文学的には「決着」をみたとされている地獄について、いまさらここで語らねばならぬわが身の不明をなんというべきなのか。深く苦悩することも疑うこともなくすごした過去の軌跡は、砂をかむ思いでしかたどることはできないが、それは自嘲にもならぬ

ほど凄まじい荒廃ではないのか。その原因はなにかといえば、わたしの内なる天皇制の問題に帰着するように思う。

ふりかえってみると、わたしには、農業を営む生家の囲炉裏を借金取りの男たちに占領され、寒風のなかを凧揚げに追いやられた、貧困にまつわる幼時体験がある。そのイメージはいまもなお鮮明である。そして青少年期の天皇主義思想体験をへて、一兵士として敗戦をむかえたのであった。焼土に立ったあのとき、無自覚に戦争に駆り立てられた不明が恥ずかしく、再びその誤りをくり返さぬことを決意し、過去の体験を鞭として天皇主義思想を撃ったはずだった。しかし事実は、根源的にそれを撃つことなく、情念としての幼時体験を跳躍台にして、観念的に革命運動の潮流になだれこんでしまったのではなかったか。ということは、わたしの革命運動体験のなかには、本質的に近代を経過しない天皇主義が潜在的に生きつづけていたということであり、それが戦後における誤謬の体系を再構築する原因になったのだと思う。おくればせながらわたしは、天皇主義思想に象徴される戦争体験を洗い直すことによって、幼時体験と戦後体験をともに撃ち、新しい主体を確立する道を歩みはじめなければならない。そうしなければ、どうしても近代を通過することができず、誤りの再生産は今後もくり返されるにちがいない。それを許さぬ壁として『井上光晴論』は書かれるのである。

わたしは羞恥の意識なしにはこれを語れない。しかし、もしわたしが、その羞恥の故に、わが文学への道として「決着ずみ」とされたコースをそのまま選択することがあるとすれば、荒廃はさらに深まり、未来において再びほぞをかむにちがいない。二十年遅れてきたということは、既

に引かれた固定のコースの対象化が可能な地点に立っているということである。したがって、わたしの羞恥と荒廃の清算は、井上氏でも野間宏氏でもない独自のコースをたどることによってしか達成されないだろう。ねがわくば、わたしの主体を賭けた独自のコースが、「決着ずみ」の立場にも生じかねない荒廃をも同時に撃つものであってほしいと思う。わたしのコースにいささかの意味ありとすれば、おそらくそれであろう。したがって、本稿が井上氏の全面的な称揚をもって終始するものでは、もちろんありえない。むしろ、わたしと井上文学との間で暗闇に一閃の火花を生みだすことを願う。その閃光こそわたしの独自のコースを垣間見させるものかもしれず、その火花こそ「わたしの羞恥と荒廃」を焼く触発物たりうるかもしれないからである。『井上光晴論』の内的モチーフもそれ以外ではない。

井上氏は、文学的に現代の矛盾を正面からひき受けようとしている作家の一人である。それは表現行為の根源に、天皇制、原爆、部落、廃鉱、団地などの状況の本質を、ひとつながりのものとしてとらえる透視図があることによって明らかである。したがって井上文学は、凄惨とも形容すべき現代状況の荒廃に全存在をかけて挑戦し、未来のイメージを先取りするきわめてアクチァルな、しかも根源的な世界にならざるをえない。その世界は≪出口なしの状況をえがいて出口とする≫しかない、逆説的で苦渋にみちた情念から発想される芸術方法によってつらぬかれている。社会科学的公式を借用しての安易な出口の設定などは、変貌をとげつつある現実にたいする批判の中絶をもたらすが故に、文学的出口とはなりえない。出口のない根源的なイメージがはげしく現実を撃ち、読者の批評精神を喚起し、創造行為への参加をうながすならば、それは出口た

りうる。文学的出口とは、未来を開示する状況設定の問題というよりは、芸術方法の問題だからである。したがって、出口のない状況を追いつめた極限で出口を発見しようとする逆説の論理に支えられた井上文学にたいする否定的評価は、わたし自身の批評方法をふくめて再検討されねばならない。

前述のとおり、井上文学をつらぬく主題は、現代の飢えの探究にある。「飢え」とは、大江健三郎氏のことばを借りれば、人間存在の深淵によこたわる暗闇である。井上氏はその暗闇のなか深く下降し、人間とは何か、文学とは何かを問いつづけ、現代の告発にすすみでようとしている特異な存在である。もちろんわたしは、それをもって井上氏だけの特徴というつもりはない。なぜなら、なにものかにたいする飢えの意識こそ、作家の情念や論理を文学にむけて駆りたてる起爆力なのであり、飢えがなければ文学は成立しないといっても過言ではないからである。にもかかわらず、井上氏こそは、人間の飢えのもっとも強烈な表現者、あくなき芸術方法の探求者として日本文学に位置していることは確実なのである。

第一章　「政治と文学」の谷間

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com